



たくさんの人に落語を届けるのが夢。
僕はまだ、夢の途中にいるんです。

誰かが笑っていると
皆がハッピーになる

小さいころから人を笑わせるのが好きでした。洋服の仕立屋だった美家では、よく物まねをしてお客さんを楽しませていましたね。すると両親がとてもうれしそうな顔をするんです。それを見てみると僕も楽しいし、お客さんが笑っている間は「早く勉強しなさい」なんて言われません。誰かが笑うと、皆がハッピーになるんだと感じていました。

でも、当時は落語家ではなく学校の先生になりたかったのです。「3年B組金八先生」など、熱血教師のドラマを見て育ったのと、中学・高校の先生の影響ですね。高校1年のとき、僕は学校の床に頬ずりをしたいと思いつき、友達とびかびかに磨きました。すると先生が「すごいな」と言って一緒に頬ずりをしてくれました。言葉だけでなく、共に楽しんできたことがとてもうれしかった。それで、僕は絵を描くことが好きだったので、美術の先生を目指して武蔵野美術大学に進学しました。

落語を表現手段にして
人の心をデザインする

こうして大学生になったものの、毎日課題の提出に追われて教職課程を取る余裕がありません。そこで、受験勉強から興味を持ち始めていた、デザイナーを目指そうと思いましたが、大学の教授から聞いた「デザインは人を幸せにするためにある」との言葉にも魅力を感じましたね。そんな大学3年のある夜のことです。アパートで課題の制作をしていると、ラジオから五代目・柳家小さん師匠の落語「粗忽長屋（そこつながや）」が流れてきたのです。

実は、僕は1年のときから落語研究会に所属していましたが、でも落語が好きだったわけではありません。人の良さそうな先輩たちが廃部の相談をしているのを見て放っておけなくなり、「僕が入ったら廃部にならないんですか」と声を掛けたのです。こうした動機です。こうして落語と真剣に向き合うことは一度もありませんでした。ところがその夜、そっかしい登場人物が右往左往す



る落語を聴いているうちに、疲れてさらさらしていた心が軟こうを塗られたように優しくなって、しかも笑って元気が出てきたのです。「落語ってすごい」と思ったとき、はっと気付きました。大学でいろんな表現手段を学んだけれど、絵や形に表すだけがデザインではない。その表現と出会った人の心の持ちようが変わることこそがデザインなんだと。そして、話すことが好きな僕には、落語を使って人の心をデザインするのが向いているんじゃないかと思ったのです。

シンプルな芸だから
想像力で楽しんで

僕が今、ライフワークの1つとしているのは、子供向けの

落語会に積極的に出演することです。落語は1人で座布団に座り、扇子と手拭いだけを小道具に使うって話すシンプルな芸です。楽しむには、お客さん自身に情景を想像していただくしかありません。今の子供は映像や情報を簡単に入手できるので、何かを想像する機会が減っていますよね。これは人の気持ち想像する力の欠如につながっている気がします。落語には、人との触れ合いから生まれる感情がたっぷり詰まっています。落語を聴いて想像力が豊かになれば、いじめも戦争も少しずつ解決していくのではないのでしょうか。

また、時代背景が分からない子供にとって落語は難しいと思いますが、子供が想像しやすい日常を描いたものもあります。例えば『初天神（はつてんじん）』は子どもが縁日で「買って！」と親におねだりする話ですし、『転失気（てんしき）』は知ったかぶりをすると良くないことを笑いながら学べる話です。僕たちはいつも、その日のお客さんに合った演目を選んで演じています。

それから、学校主催の落語会では子供たちを前に、親を後ろに集めることがあります。僕が隣同士に座ることをすすめています。そうすると、お互いが笑っているのを横で見ることができるようになります。親は子供を見て「こんな場面で見えるようになったんだ」と成長を感じられますよね。一方、子供は親が笑っている場面で見えないことがあるかもしれません。でも、それがいいと思うのです。今、大人になることに憧れを持ってない子どもが多いですよ。そこでもし「何でここで笑ってるんだろう。大人っていいな」と思ってもらえたら、本当にささやかですが、大人になりたいと思う力の1つにしてもらえると思うのです。

挑戦をすることで
悔いのない人生に

お客さんを楽しませるには、まず僕自身が人生を楽しむ生きなければと思っています。そこで実践しているのが、自分の可能性を信じて多様な挑戦をすることです。それで二兎も三兎も追って、結果的に一

今の自分から、あの頃の自分へ

From your own self, to yourself in those days



4歳のとき、近所の人とピクニックに行っておにぎりを食べている写真です。忙しい両親に代わり、僕の面倒を見てくれたのは近所の皆さんでした。宿題を教わり、一緒にご飯を食べ、お風呂にも入れてもらいました。まさに落語に出てくる長屋の風景です。あの頃の自分には「その愛情は宝物になるから大切にしなよ」と言ってあげたいですね。

はやしやたいへい ● 1964年、埼玉県秩父市生まれ。1988年、林家こん平に入門。1992年、二ツ目昇進。NHK新人演芸コンクールで優秀賞、にっかん飛切落語会で特別賞や奨励賞を受賞。2000年、真打昇進。国立演芸場主催花形演芸会で2度の金賞。2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞。2010年～武蔵野美術大学客員教授。2014年～(社)落語協会理事。明るく元気な芸風で老若男女を問わず人気が高い。レギュラー番組に日本テレビ『笑点』、文化放送『林家たい平 たいあん吉日! おかしら付きり』など。